

## 自叙伝にあらわれた国立大学

### 学生の宗教と社会思想

岡部 弥太郎

ICU教育研究第二号（一九五五年一月）に私は「自叙伝の研究と自叙伝による研究」を書いた。その後半「自叙伝による研究」の内容は「基督教主義大学々生の宗教」であった。その中で私は時々対照のために国立大学々生の場合に言い及んだ。例えばカトリック大学にカトリック信者一八%、それに略同率の信仰を望んでいる者、抛りどころをカトリックに求めている者、カトリックを研究中の者がいて、その大学のカトリック大学たる特性がかなりはっきりしているとしたのに対し、「国立大学々生の場合……その印象からすれば一%のカトリック信徒もないようである」（同書八五頁）とした。又「国立大学の学生にとって社会思想が目立った問題であるが、キリスト教大学の学生にとっても、宗教は個人の問題だけでなく社会をどうするかの問題となっている」（同書一〇五頁）とも書いている。この場合私は統計も挙げなかったし、その信仰や社会思想の内容についても何にもふ

れるところがなかった。ただ多くの国立大学々生の自叙伝を読んだ印象にたよって言っただけであつた。それを補う意味で本稿は書こうとするものである。

資料として用いたのは一九五四年の十一月に書かれた自叙伝一〇〇名のものである。筆者の教育心理学の講義に出ることになった学生に一ヶ月程の期間を与えて書かせたもので、最初定めた期限内に提出されたものの中、五十音順に並べて一〇〇名分を取ったものである。自叙伝の書かせ方、その信頼性については前稿に一応予備的な考察をして置いたがさらに別稿においてこれは改めて考察することとし、ここでは前稿に用いた資料と同程度のものであると言うに止めて置く。この一〇〇名の中一〇名が女子学生で、全体としては、文、教育、教養、法、経、理、工、農、医のあらゆる学部 of 学生が含まれている。文学部の学生数が最も多い。一〇〇名についてであるから、実数がそのまま%を示すこととなる。

これらの自叙伝の中に多少でも宗教のことを書いたものは二六名であり、社会思想に關した記述のあるものは二五名である。一人で宗教のことも社会思想のことも両方を書いたものが五名いるから、これらを書いたもの of 実数は四六名（中女子四名）であり、従つて宗教のことも社会思想についても書かないものが五四名（中女子六名）である。

宗教のことを書いた二六名の中

カトリックの家庭に生れたカトリック信者 一名

両親がプロテスタントで幼時からの信者 一名

自叙伝にあらわれた国立大学学生の宗教と社会思想

中学において受洗キリスト教徒となったもの 一名

大学に入り休学中受洗したキリスト教徒 一名

以上四名がキリスト教徒である。一%もないかも知れないと思ったカトリック教徒が一%はあった。しかし前稿に取扱ったキリスト教主義四大学では三五%のキリスト教徒があったのだから、やはり「これは国立大学などに比して非常に多いキリスト教徒の割合である」と前稿に言って置いたのはそのまま認められ、国立大学には四%のキリスト教徒しかないのである。宗教についての他の記述者はどうか、

仏教徒と見られるもの

五名（但し現在信仰を持っていることを明かにしたものはこの中の一名）

現在宗教に関心あるもの

五名（中一名は新興宗教に対して）

背景にのみ宗教のあるもの

九名（中キリスト教的背景四名、仏教の背景一名）

宗教を否定するもの

三名

である。

以上が国立大学々生の宗教に関する現状を代表するものであるとは言えないが、大いにあり得べき現象を示し

ているように思われる。さらにその内容にはいつて見て行くこととしよう。

先ずカトリック教徒について、「私の家は代々（といっても祖母の代からだ）ローマン・カトリックを宗旨としていた。従って私も生後間もなく洗礼を受けた所謂ボンクリスチャンである。この事實は私の今までの生涯を決定的に色づけたし、これからの生涯も恐らく終油の祕蹟を受ける迄、これによって運命づけられることだろう。」運命という言葉を用いてはいるが彼は死に至るまでカトリックであることを見透している。彼はある時には神父になろうとの未来像を描いたがそれが哲学者のそれと取り代えられていく。中学の時に太平洋戦争が起る。「街々の電信柱には『英語教育徹廃』のビラが貼られた。歴史教育も徹底的に歪められた。兄の机のひき出しに潜んでいた『唯物史観日本史』を拾い読みした私にとって『神国日本』『現人神天皇』を絶叫する歴史教師の授業は全くナンセンスだった。』『マルキシズムの本はどこの本屋にも無かったので読みたくても読めなかった。しかし『宗教は阿片なり』というレーニンの言葉が非常に浅薄に思われて積極的に研究してみようという意欲は持てなかった。』

次のプロテスタント幼時からの信者、彼の属するキリスト教の団体によって中学校と高等学校とが出来た。彼はその中学から高等学校へ進む。「高等学校二年生の頃は重大な時期であると思う。毎日の礼拝においても批判的となり、中等部の生徒が多数バプテスマを受けるのを見て、クリスチャンのマス・プロダクション反対を主張し、聖書の答案には牧師を批判したり、キリスト教をけなしたりした。加うるに牧師の私生活を見たり教派間の争を目撃したりする僕にはキリスト教は空しいものに見えて来た。牧師は神の言葉を語っているのであって、神

の言葉が唯牧師の口を通して我々に来るのだという風に自分を説得しても、やはり私生活のあやしい牧師の語る言葉は神のものとは思えなかった。僕はこの厭な気持を天体観測と共学の女性にまぎらわそうとした。」大学にはいつてからのこと、「ある学友が、俺は靈魂不滅の思想ときっぱり手を切った。唯物論を全面的に受け入れる」と宣言し、僕に将来の歴史家はマテリアリストでなければモノにならんと宣伝した。残念ながら僕にはマルキシズムに徹することは不可能であった。唯物史観を否定的に批判しても積極的に理論的に『これが歴史を動かすものだ』と友に返答し得ずにいる自分を悲しみの眼で眺めた。僕はこの宙ぶらりんの原因を自分のキリスト教的環境に求め、数々の礼拝の場面に唾した。」しかし彼は今はどうか、「僕はオリエント古代史を研究しようとしている。そこに支配するものは古代人の宗教感情である。益々唯物論のみでは解決のつかない多くの問題に直面する。最早自分は過去のキリスト教的な生活環境に唾する者ではない。生の難関に直面する時、僕は誕生の奇蹟の中に（註、彼は帝王切開によって生れた）神の生への至上命令を見出しているのである。」

中学三年のクリスマスに洗礼を受けてクリスチャンになった学生は生物学の学生である。「当時アメリカからある派のキリスト教が宣教に来て近くに住んでいて、そこでは進化を絶対に認めなかった。生物に興味を持っていた私が進化のことにキリスト教のことを考えるようになった一つの原因はそこにもある。翌年からの日記を見るといろいろ自己を反省してクリスチャンとして生活しようとしていることが分る。」彼は田舎の中学を卒業してその年に大学にはいれた。いろいろ悩みを経験し、胸を徴かに侵されたことを発見したので出席授業を半減して健康の恢復を図り留年もした。「自分の力にも自信が持てる様になったし、欠点なり限界にも気附いた。欠点を善

用、改善し限界内で自己の力を最大に發揮しようと考えた。高校時代の悩みも割切ることが出来た。孤独を好む性質は薄くなった。悩みの解決に自分の力を信ずる様になったし、又キリスト教に対しては新しい観点から信仰が固りかけて来た。唯物論とキリスト教的見地など未だ未だ問題は残っているしこれからも多くなるだろうが、多くの立場を見、聞きして、自分の考で消化してそれに当る自信が出来た。」と言っている。

大学にはいってから休学中に受洗した人は農学部の人でその時までキリスト教のことを殆んど知らなかったようである。その点に特異な観点があらわれている。「私が何故教会に行く様になったか、そのきっかけは私にもはっきりとはわからない。ただ休学する一つの理由となったものは自分の、又人間の理性を信用できなくなった、従って理性をすっかり捨てようとしたことである。たかが二十歳前の学生が何かについて確信をもって自己の貧弱極りないあやふやな理性をもって物を判断することの矛盾に悩んだことである。ただ何かに浮かされているとしか考えられぬマルクス主義的学生の態度に疑問を抱いたことである。勿論私自身は宗教などはやりたい人がやればいい位に思いむしろ社会主義的な考をもっていた。ただ私が強調したいのは理性を捨てようとして私が決心したとき、即ち一切を否定しようとしたとき私の心を満したものは愛であった。愛こそは絶対に否定できぬ唯一のもの、凡ての根源であり、凡てを覆いつつむものであると感じられたのである。従って私の市にあつたいくつかの教会の一つに通い始めても理性をなるべく捨てただあるものを、そこに存在しているものをそのまま受取ってみようとしたのである。だから信者になろう等という気は始めから全然なく信者の青年達といろいろ話し合ったりしたのである。ただ私が教会に行つて驚いたのは教会はそしてキリスト教は私達無縁の人が考えていたのと何と

違っているものだろうかということである。どこがどう違っていると正確に言えないがとにかく誰も彼もキリスト教は勿論宗教に関してあまりに無知すぎるということである。もし誰かが宗教とは少くともキリスト教とはこんなものであろう等と考えていたら即刻その考を捨てるべきである。思いもかけなかった別の生きた存在であることに気附かれるだろう。そんなわけでこちらでも休学して多少ひまがあったからあれこれ勉強する様になり、その年二十六年十月に復学しても教会や神学院に通って教理などを学び翌二十七年四月二十日（復活日の次の日曜）に帰郷し教会で洗礼を受け教会的に言えばキリストの体につながれたのである。」

キリスト教徒四名の信仰に関する記述を、私はやや詳しく引用した。幼時からのキリスト教徒とそうでないキリスト教徒との違いもそこに見られる。そして殆んどいつもキリスト教に対立するものとして出て来るのはマルクス主義である。

次に私は五名の仏教徒の信仰について見て行きたい。但し前にも記した如く現在信仰を持っていることを明にしたのは唯一名のみである。その人は農学部に属する。

「○大にはいった喜びは一週間とは続かなかつた。憧憬の大学の授業の詰らなさ、仮面をかぶったクラスメイト、社会の救われない矛盾、自己の無力を思い知らされた傍ら、大きな劣等感に支配されてゆくのだつた。劣等感はニヒリズム・厭世観に自然に導き、無為の生活はニヒリズム・厭世観に拍車をかけた。私はこうして神経衰弱に陥つた。九月病気になるとともに私は休学した。現実より逃避することが無駄であると知りつつ逃避を願っていた私は病気になることを天に謝した。宗教でも、主義でも、女でもいい、依りすがるものを私は求めた。

一生涯を経てあるいは明白となるかも知れない人生とはの命題は解決される筈もなく、結局中途半端な点で妥協した。だから再び登校するようになってからも瑣細な事件で動揺し、厭世的となり、死の谷間に落ち込んでしまふのだった。」私は地理学、俳句、山岳等に依りどころを求めて熱中し次々と冷めた。対象が頼りなければ頼りない程対象から確固たるものを掴みたくて熱中したが、結果をあせる私が裏切るか、対象が私を欺いた。その度毎に心を清算するために放浪の旅をした。それは自然を求める場合も、古典への思慕である場合も、西欧の偉人へのそれでもあった。そうした旅の中で私は宗教にめぐり合ったのだ。飢えた私の心がキリスト教でなく、儒教でなく、その他の何ものでもない浄土真宗によって満されようとしているのだ。煩惱熾盛、罪悪深重な自分であると認識するにつけて、親鸞の説くそのまま救われるという教えに引きつけられてゆくことをどうすることも出来ない。それは自ら得た信心ではなくして賜りたる信心である。……生涯救われない自己を凝視しつづけた親鸞の深い人生苦が強く捕えるのだ。私はこの邂逅への謝念を記して、将来の私の進む方向がそこにあることを明らかにしたい。」

仏教徒ではあるが特別に信仰の認められぬものが四名ある。

その一人、「私は……浄土宗寺院に末子として生れた。」小学校五年の四月に得道式をして名を改めた。三年の冬から、毎朝師匠のところに通って経を習ったので、その時には大部読めるようになっていた。「私は今でも今後何学部へ進んだら良いのか判らない。文Ⅱを受験したのも家の職業上から、理科ではあまり……と欲してただけの話である。」今、毎日なんとなく通学している。趣味と言えば映画だろうか、月に十本は欠かさない。私



には主義なんて言うものはない。難しい事を並べて得意顔をしている奴（本学々生に多い）を見ると、鼻持ちならないと思う。」

もう一人、戦後姉を失い、母を失い、兄の自殺にも遇っている。「（中学二年のとき）ある人の世話で我々（残った一人の兄と）がさる寺の弟子になる話が決ると、あの我の強い父が真に嬉しそうな様子で和尚と話していたが、長兄を政治家に、次兄を医者に、私を実業家に仕立てる心算だった父の心中は何とあわれだったろうか。」

「寺での生活は又苦惱多き束縛の生活であった。ここでは先ず偽善を学ばねばならなかった。次いで繁文褥礼を覚える必要があった。礼儀とは遠慮することであった。この五年の生活で赤裸々な人間性を発見する力と、赤裸々たる力を完全に喪失した。」

「高校三年の終りである。医科を辞めさして学芸大学に兄をやって先生と僧とを兼ねさそうとした和尚は私を〇〇大学にやって僧とする心算であった。私はそれを拒否して勝手に寺を飛出し〇大を受験して落第した。東京で就職口を探したが見つからなかった。父の貴重品を処分して持参した金を費消した時、冷酷水の如き社会を呪いつつ故郷にまい戻った。勿論寺には帰れなかった。パン屋で働いた。和尚は半年後私を呼返してくれた。それ程〇大に入り度いのなら仕方がないという訳である。併し私は単に〇大に入り度いではなかった。失われた自己の人間性に再び息吹を与えるために自由な生活を欲したのだ。」

第三人目は一寺院の長男に生れた。しかし信仰については一言の叙述もない。ただ「中学の三年間、休日毎に隣村のある寺院へ法式に使う声明や、また作法等をいろいろ教わりに通わなければならなかった。」とあるだけである。

第四人目においては宗教という言葉はその生れた家の背景をあらわすために使われているだけである。寺に生れたことのみがあって信仰のことについては何等の叙述がない。

私は国立大学においてキリスト教を信ずる者が多いだろうとは少しも予期しなかった。しかし仏教がかくも無力であることを知ったのは非常な驚きであった。仏教はわが国における尊い伝統の一つであると思っていたのにここにおいて私の見出したものはかくも貧しいものであった。これでよいとは到底考え得ないのである。割合から言えば仏教の信仰を言いあらわしているのは一%、正にカトリックと等しいのである。

現在宗教に関心あるものは五名である。その中やや積極性のあるもの三名の叙述を挙げて見る。

その一人、「友達は恋愛を語り、若さの永遠を信じていた。そんな中で私は、一人恋も出来ない人間、若さも信じられない人間として、ポツンと一人だった。私には友達がうらやましかった。そのうちに私は『神』を意識する様になった。キリスト教でもない、仏教でもない、ただ、私の心の中から自然に湧き出て来たものを私は『神』と名づけ、それを信じた。私はそれを信ずることによって人間のむなしさを知った。私はこのむなしさを知ることによって心の落著きを得た。このむなしさを意識することは、今では私にとっての最大の活動力となっている。」

もう一人、「家をやられてから（註、戦災で）私達一家は〇〇県の実家に帰った。クリスチャンを家長とする生活であった。この時私はキリスト教にいささか関心を持つようになった。しかし、私の科学的、論理的思考態度は容易に信仰には導かなかつた。今でも興味は持っていないでもキリスト教徒ではないのである。」

三人目の人は新興宗教に関心を持っている。「今私は宗教に心が向いている。それも既成ではないのだ。知識人が一言で嘲笑する新興宗教だ。自分が内面を向いた人間であることは、自分が何かやろうとすると絶えず自分ではないものが演じているのだ、繰つられているのだと思ひ、僕は僕自身を恥じてしまう。しかし宗教へは非常な反抗を試みたい、反撥を感じ乍らも進んでいくのではないかと思つてゐる次第である。」

宗教が背景にのみあつたものについては、あまり言う必要はないと思うが、それらがどんな類のものであるかを少し例示して置きたい。

その一人、「キリスト教関係の幼稚園にかよつていた。」「私は中学の頃教会に一時行つていた。しかし心の中でこれは単なる苦しさを逃れるための逃口上のフィクションだという考えが芽生え、やめてしまった。」

次の一人、「父母は苦しい中から、私を〇〇女学院というカトリックの仏人経営のお嬢さん学校に入れました（勿論転入試験は軽く通り）私の氣持の荒んだのを知つて、少しでも昔のように純にして和やかさを取り戻させなかつたのでしょう。」「三年の進学の時に又激しい氣性が表われ、宗教的な良さと不合理にみちた……この学校に我慢が出来なくなり、〇〇の高校に行くのを止めて府立に行くことにしました。」

三人目の人、「小学校五年生の時、学校の図書の積尊伝を寸陰を惜んで一年間に三回読んだ。……永遠の真理に対する情熱を燃え立たせたのである。しかし真の私の興味の中心は、むしろ人生の真理を釈迦が論証して行くその論理的過程にあつたのである。（その後も宗教的関心は心中に燃えつづけたが、遂に神も仏も見ることとは出来なかつた。……）」

宗教に言い及んでいるがこれを否定するものは三名である。

その一人、「(中学五年)サークルは弁論部に入りキリスト教的な克己主義について弁論したりした。」「その頃の私はロシア語に憧れていたので、どうしてもロシア語のある〇高に入ろうと思っていた。しかしその夏また肋骨カリエスになってしまい学校を二ヶ月近く休んだ。……私はもう受験勉強も出来ないと思って失望してしまつた。その頃私の中にあつたキリスト教的な絶対真理がものすごい勢で崩壊していった。そのあとには強いニヒリズムが残つた。」「私は〇〇高校文科甲類に入学した。やっぱり嬉しくて……旧制高校のみなりをして歩いていた。〇〇高校は当時都内高校中最も生徒が進歩的であつたので私も相当強い影響をうけ、全学連結成の契機となつた授業料値上反対ストに私も参加した。マルキスト達のブルジョア的なものに対する批判は、一切の価値観を否定する私にはスムーズに受入れられたが、政治と文学の関連が私にはつかめなかつたし、私の生き方は政治理論であるマルキシズムではどうしようもないと割切つていた。私のこのニヒリズムは法則、尺度を強く否定したが、その否定が強ければ強いほど、又法則、尺度を求める心も強かつた。」「彼は大学に入学した。」「七月の三鷹事件・下山・松川と相次いで起つた事件に対する政府の態度に強い反撥を感じ、行動しないことへの自責の念が次第に強まってきた。その頃私はエスペラント運動に入り、友人とエスペラント会を作つて情熱を傾けて活動し始めた。活動することの中に私はニヒリズムから脱出を試みようとしていた。……私はマルクス主義が実践を通してのみ真につかめることを知らなかつた。私は極めて思弁的にマルクス主義哲学の本を読んでいった。次第に私はマルクス主義の真理性を確信するようになっていった。」(註、この学生は四年間休学療養して復学したもの

である。)

もう一人、「俺は親切な奴をいぢめるのが面白い、恩を仇で返すのだ、恩が何だ、丸でおかしいではないか、自分が満ち足りているから勝手に恩を着せやがって、面の皮を剥いでやるぞ、私は変なキリスト教じみた説法が大嫌いだ、何が祝福だ、聖書だ、そんな都合のいい説法で人が救えるのか、私は人生を冷笑する。」

三人目の人、「思想的にはこの頃より(高校二年)無神論を支持するようになった。それまでは父の年忌にしろ、祖母の葬式にしろ、仏式で行われることに何の疑問も抱かなかつたのだが、私の知人でクリスチャンであった人が死んだとき家族が仏式によって葬儀をし、墓銘に『この人仏道に疑いあり云々』とかかれたのを見て、宗教に疑問を起し、種々考えた結果、宇宙には神は存在せず、大自然のみが存在するという結論に達したのである。」

社会思想については、宗教のところ既に一緒に出て来たものがあつた。マルキシズムと共産主義とが問題の中心になる。社会思想のヴァリエティに就いて見て行きたい。

ごく簡単なものもある。(a)「現在、種々考えるべき社会の事がある。」というのが一つ、もう一つは、(b)「大学に入学してから私は理科であつたが政治的関心から種々の政治の本を読んだ。しかし特定の政治思想に引かれたのでなく、『国民を幸福にしなければ』といった単純なものであつた」というのである。

マルキシズムに傾倒している一例、(c)「メーデー、浅間山闘争と矢つぎ早に起り、社会科学の知識の必要が痛感される様になりコミュニズムへの関心も強くなつた。実にしっかりとした人間としての、友達のコミュニストにひどく影響をうけた。自分でも、今まで与えられて来た偏見をなくすことにつとめ、マルクス主義理論を讀

んでいくと、今迄漠然としていた社会のいろいろな問題がはっきりと目前に現われて、具体的に理解出来るようになった。その正しさは段々勉強していく内に確信となって来た。メーデーの感激が後々迄残った。労働者階級の力強さに対する信頼をもたせてくれたのである。」

もう一人、(d)「(高校において)私はきわめて自然に社会問題の方へ関心を向け変えていった。(註、詩に対する熱情から)先ず第一に私を捕えたものは毎日の新聞にのる親子心中と町に溢れる高級車の波であった。なぜあの気の毒な人々は死ななければならないのか。又一方にこういう人々がいるのに、どんな理由で、何の権利があつて資本家と呼ばれる人々は贅沢なことが出来るのか。はたして労働者は資本家と対等の立場で契約することが出来るのであろうか。このような疑問が次々に湧いて出た。私が社会問題に関心を向け出してから数人の友達が出来た。彼等はこの方面では少くとも私の先輩であつたが情熱が欠けていたし、実行力もなかった。彼等は前から一つのグループをつくっていて、もぞもぞ何かやっていたが、具体的な成果としては何も現われなかった。そこで私がリーダー格となつてクラス新聞をはじめた。」「私は大学には一種の期待をもっていた。自由の砦としてのそれである。しかし入ってみると到るところ黴くさい臭がふんふんと鼻をついた。学生は黒い制服に身をかけため同じような顔をして歩いてた。活動家と目される人は自分のどなる声が自分の顔によく響くのを楽しんでた。私は少しづつ沈黙を守るようになった。私は黙つて周囲の人々のたてる声を聞いていた。私は社会を変革しなければならぬと確信し高校生なりに一生懸命努力したつもりである。が所詮一介のロマンチストにすぎなかつたようだ。私を社会運動に投ぜしめようとしたものは自分の生活を守るためではなかつた。社会の下ずみと

なって苦しんでいる人々に対する同情「人間の平等」への熱烈な信仰というようなものにすぎなかった。このような私に対して学生運動にたずさわっている人は言うかも知れない。圧迫が加わっているのは労働者だけではない。我々すべてにおしかぶさっているのだと。私はこのような意見に少しも異議をさしはさむものではない。」これから又少し転回した考が出て来る。「いやそれどころか確かにそうにちがいないと思っている。それにも拘らず私は今の沈黙を守っているよりしかたがない。私達は今は学生だが後何年かたつと卒業してほとんど大部分のものが就職する。そして現在私達が憎悪していることを繰返さなければならぬ。……私は勿論自由を求めている。又人間を平等の地位に帰して再出発させなくてはならないと思っている。しかし自分が飢死してしまった後の自由や平等が何になる。私は社会に尽す気は十分に持っている。しかし私は社会全体を幸福にするとともに自分も幸福になりたいのです。私は社会の幸福なしには自分の幸福が考えられないと同じように自分の幸福を抜きにした社会の幸福というのも考えられないのです。エゴイストと笑いたい人は笑って下さい。」

もう一人、(e)「大学に入ってマルキシズムの洗礼をうけ進歩的な思想にも接してみた。しかし今では積極的に参加する意欲もなくなっている。むしろ左翼系の運動に批判も加えたい様な心境になった。この運動の理論的な正確さや、献身的に活躍している人々に私は尊敬の念は払っている。しかし何か言外にあるわり切れないものを感じている。」

もう一人、(f)「煙突の煙でくすんでいるようなごたごたした家並、*「場末」*という言葉がびったりする野暮ったさ、そこから滲み出る庶民性が好きである」というようなところに生れ、現在も住む人、○大に入学するま

ではかなりの若労を重ねている、兄はいわば彼の犠牲となって働く、「僕は近くの学生、労働者が中心となっている」社会生活の苦しみを話し合う会」に入り一緒に勉強していくようになった。今年の四月復学した僕はメーデーに参加した。選挙権デモにも参加した。そして社研にも入会した。このことは僕に「学生も社会を良くしていく活動と強く結びつかなければ、真の勉強をすることが出来ない」という確信を強めるだけだった。」

もう一人、(g)「(高校で)友達との種々な議論を通じて社会科学への興味が出て来て歴史研究会に入った。ここでの活動は卒業まで続いた。この間興味がマルクスに向いてくるにつれて父と話すことが多くなった。そして私が得意になって共産主義を論ずるようになる」と父は主義に異論はないが、私がそれに身を投ずるのは困ると大反対し、高等学校を退学させると迄言った。二年の時の事である。父は私を普通に出世の出来る〇大の法科へ入れたがった。私は理科に行くと言って意地を張り理科一類を受験した。……一年浪人した。父は百姓をしながらもう一年やるさと言った。然し二人の弟と妹にも平等に教育の機会を与えるために、早く独立出来る文科一類へ行くことを望むと言った。私は社会科学もやりたかったので承諾した。四月から十一月まで百姓は地獄の生活をする。十二月の農閑期になると、私は自信を失っていた。が結果は成功だった。ここで私は初めて家を離れることになった。が〇〇寮での〇大の生活は私の大きなピンチとなった。私には何のために勉強するのか解らなくなって来た。毎日の激しい百姓に比べて、学校にいたことがはがゆかった。メーデーに参加し、デモ毎に出掛けても、後には空虚が残るのみだった。」

もう一人、(h)「自分は文科二類の学生で、将来〇文を専攻しようと思っている。しかし、観念的に物事を見



易い自分はむしろ理論家と人から言われることが多い。自分としてはあくまでリアリスティックな態度で人生世界を見るように心がけている。そのような意図もあって、今は寮に住んでいるが、その寮の仕事を少しばかり行っている。理論的であろうとしリアリスティックであろうとする態度はマルクス主義と結びつき、自分の現在の課題は、如何にして、自分の周囲にめぐらされた、諸種の困難の網を切りくずして、自分を本当に弁証法的唯物論者とし、自己を実践的な人間にし、もっと適切には、如何にして自己を革命的な人間にしていくかということである。」

もう一人、(i)「僕が社会主義的な考え方をしはじめたのがいつからかは、正確には言えないが、とにかく中学のおわりごろに、わからないままに社会党がいいと思っていたことは事実である。多喜二の作品は、高校一年の時カニ工船と党生活者を読んだが、かなり深い感動をうけた。もちろん肯定的な感動ばかりではなかったが、それでも共産党員がどんなに真剣な闘いをしているか、労働者の生活がどんなに苦しいものであるかを、その時はっきり知ったわけである。新聞部に入って上級生からアカハタを読ませてもらったりもした。しかもちょうど、日本がいわゆる逆コースに入りはじめた時であったから、多喜二はそれ以後深く広く、僕の考を支配して行った。……大学の一年半僕は民族独立のために本当に真剣な闘いを続けている人たちと知りあったし、また自分でもできるだけその方向へ向っての努力をした。……僕が教師になろうと考えたのは……そのような道しか残っていないというような理由もなかった。しかし、それ以上に、生徒としっかり結びあった教師の尊さが、僕の教員志望の積極的な理由であった。旭丘中学校の闘いの話をきいて、また『ともしび』や『二十四の瞳』

などの映画を見て、僕の確信はますます強められている。」

もう一人、(j)「高校中共産党の〇〇〇〇氏の息子と同級で共産主義に対して好感をもった、今でも持っている。」というのもある。

もう一人、(k)「(小学校)五年の時父の職業が不安定で随分苦しい生活を送った。この頃から父の持っているアカハタを興味をもって読むようになった。」(中学校)私の思想もきわめて進んだ。わからぬながら弁証法の本を読んだり、唯物論の本を読んだりした。発表の意欲も出、校内弁論大会で一位をとったりした。」(高校時代の私もよく勉強した。成績もよかった。それと同時に、平和とか再軍備の問題について、何かをしなればと思った。何かを——グループをつくった。話合う、それだけのグループだ。しかし心の底からのファイトは出来なかった。」(大学入試が迫って来た。当面の目標のために勉強した。しかし何もしないのも気がひけ、出来ることを話し合い——をやった。しかし、当面の目標のためにもっとも大切なことはそっちのけにする、そんな性格がこの頃からきずかれたと思うと口惜しい気持である。」「〇大に入った。……私にも自信があった。何か出来る、と。ただ、その何が何であるのかが自分にはまだつかめぬ。……半腰的人間、ハダカになれぬ人間——私の自己批判はこれにつきる。」

もう一人、(l)「大学へ入ってからは私にとって精神的にも肉体的にも変化が大きかった。大学生々活に期待はしていなかったのであるが、私は入ってみると、そこから最もみのり多き収獲を得ることが出来た。私は歴史にさからって少なくとも生きたくないと思った。本当の意味での民主々義、自由とは何であろうかと深く考え

させられた。新しい社会に対し故意に眼をつぶることの愚かさを知った。われわれの世代が本当の意味で新しくならなかったら民主化もそれだけ遅れるのだ。私はすべての既成の考えを捨て新しく考えなおしてみようと思った。学問自体にも批判の目を向けた。そして何が時代の流れであり、何が真実であるかを少しは見出せたかに思われた。社会に目を向けた私は、その時非常にマルキシズムに近づいていた。この方面の僕は今も眠っているのではない。しかしそれよりはるかに大きな愛の感情がそれ等すべてのものをも押し流してしまった。左翼の学生は文句をつけるだろう。しかし私は自分の道を進む。「正しく」なくてもかまわない。しかし勿論歴史的に生きようとは思ふ。私は愛の中から本当に新しい愛、結婚、家庭のモラルを作り出そうと思う。」

もう一人、(m)「あこがれの〇大の門をくぐったが、中で我々を待っていたのは学生運動の激しい嵐だけであった。メーデーや浅間山の基地問題で語学の授業はどんどんつぶされた。運動の先頭に立つ学生の態度は高圧的だった。独善的であった。彼等の行動には前衛意識があふれていた。彼等の思想のみが唯一絶対のもので、それを我々皆に押しつけようとしていた。私は先ず感情的に彼等に反撥せざるを得ず、ことごとく彼等と衝突した。反米反ソであった私の思想は反ソ一辺倒と変っていった。しかし私のアンティ・マルキシズムは何ら理論的な根拠を持っていなかった。そこで家に帰れば習いたての経済学の知識を振りまわして夜おそく迄、親父と、資本主義と社会主義の是非を論じた。十六・七世紀のリベッター(註、?)が信仰と科学は別の問題であると論じ、又二十世紀においては今度は宗教の側から宗教と科学は全く別の問題であると主張している如く、私も又科学としてのマルキシズムと、現在のソヴェトのマルキシズムは全然相異なるものであると、自分に言いきかせて、自

己矛盾をかくした。」

もう一人、(n)「大学に入って今まで無関心のため空白であった思想に対する問題も大きく私に入って来た。この空白状態にいわゆる二つの思想の対立がそのまま持ち込まれ既成のわずかな思想の芽生えも打砕かれてしまった。当然の成行きから進歩的といわれる思想に興味を覚えた。入学した年のメーデーにも、無我夢中の中に入った嫌いもあったが参加したり、社会科学的研究ということにもいささかの興味があった。基地化への激しい闘争の時期でもあり、いわゆる米國資本主義の横暴ということが口をきわめて言われている時でもあった。日本資本主義講座を読んだりもした。級中の能弁な人のまくしたてる意見にも感心もした。しかしあともう少しという所でいつもたじろぎがある。このことから一足跳びに親ソ的な気分になることは、どうしてもできなかった。ソ同盟と一口にいうがソ同盟内部においてソ連邦とその友好諸国との関係、又東独等東欧諸国との関係に主旨の違いはあれ日本における基地化の様相と同じ現象が果してないであろうか、又ベリヤ追放による肅正がいかなる意味を正確に持っているのであろうか。そして徹底的な唯物論的な物の見方が人間の心理的な面に及んで唯理的な観察方法が後退するという懸念、科学がイデオロギーに従属する形を示しているという様相は一辺倒な考えに大いに反省の余地を与えた。かかる単純な疑点が十分に解決しえない所にもいささかの不満もあった。物事を美事に割り切って記述する方法は、驚嘆に価するが、物事の判断を一定の形で処理するような方法に全面的な贅辞をあげせられないのであった。ということは何も資本主義の悪い点を含めて一切是認するということではないのである。もろもろの疑問が解決したら、そして物事のわかっているのは俺たちだけだというような態度が改められた

り、例えば級の盛り上りとか、意向の反映とか、諸先生がたとの話合いなどという鼻持ちならぬ一連の慣用語を、もっとあらぬ反感をそるようでない言葉を使うようになるならば、私としても社会主義の理論的の素晴らしさがわからぬでもないのであるから、思想の転向も可能であるかもしれない。」

## 概 括

これは自叙伝による研究の第二報である。第一報において「基督教主義大学々生の宗教」を取扱ったが、今回はそれに対照させるためのものであった。但し私の自叙伝研究では主流をなすものではなく、むしろ副産物的のものである。キリスト教主義大学四つにおいては全体として三五%のキリスト教徒があったが、ここに選ばれた代表的国立大学には四%のキリスト教徒があったのみである。これらのキリスト教徒がその信仰を保つ上において問題となって来るのはやはりマルクス主義である。四名が何等かの意味でそれに言及している。仏教徒と目さるべきものは五%であるが、一名を除いては仏教信仰を少しも表明していない、ある種の反感が表現され、そしてマルクス主義もそれらの四名においては何等問題となっていない。キリスト教徒の中にカトリックが一%あったが、仏教信仰のあらわされたものが同じく一%に過ぎないことは驚くべきことである。社会思想を表現しているものは二五%であった。その中はっきりとマルクス主義信奉を表明している者は三%唯物弁証法的革命的人間たらんとする者が一%、合して四%で、正にキリスト教徒の数に当たっている。その他にマルクス主義に好感を表明している者一%、マルクス主義、共産主義に大いに影響されその信奉者に近くありながら何等かの保留条件

を附しているものが六%である。学生運動のあり方に反感をもって反ソ一辺倒になったというのが一%ある。宗教信仰がどんなものであるかについても、又社会思想の内容がいかなるものであるかについても種々の叙述をかなり詳細に引用して置いた。それらはこれら学生を教育する者にとっては貴重な資料となるであろうと思う。

(一九五六年二月一六日)